



杉木立の中で、栄華の名残を留めるひかり堂が、また新たにその歴史の時間を刻みます。行事参加会員の漸減や高齢化が進む中で、東北支部も少しずつ「寒冷化」に向かいつつあるわけですが、別のエネルギー源を模索する一方で、御堂とまではいかなくても、何らかの足跡を残してはとも思うのです。では、支部長の少しシリアスな年頭のご挨拶から。



年頭のご挨拶 支部長 川口 直樹



新年おめでとうございます。

新しい年がきて、それなりの希望が湧いてくればいいのですが、どうも世の中は、このところゆっくり坂道を下っている様な気がします。

企業であれ個人であれ、どこかタガが緩んでいる様で、それがマスコミを通じて増幅されて伝わってきます。

若年層の就職難があるかと思えば、テレビは若手芸能人のオチャラケ番組が多く、我々の世代には判らぬ事ばかりです。

諸物価の値上りだけでなく、税金、社会保険料も上昇しており、高齢者には有難くない状況にあります。

ここで高齢者の出番となって、昔のようなシンプルライフ、即ち物を買すぎることも無いけれど、ゴミや無用な廃棄物も出さない、器を持って豆腐を買いに行く様なライフスタイルに戻らねば、地球温暖化に行き着く高度消費社会に未来は無いと考えております。

しかし出番は来そうもなく、老の繰り言と言われるのがオチかとも思います。

正月早々あまり面白からぬ話題で済みません。

思えば現役時代の会社の年頭所感といえば、会社は厳しい、会社も大変な状態にあるという危機の訴えばかりでしたが、でも、みつわ会の皆様には共感してもらえるものと思いつつ、敢えてご挨拶といたします。

ドイツ人との交流 星 利夫

(後 篇)

電車の待ち時間は、思わぬ楽しい一刻となる。場面は松島駅前の土産物屋。土産物の箱入り菓子が雑然と置いてある田舎の菓子・雑貨店のたたずまい、コーヒーは？と壁を見るとコーヒーのほか、数種類の飲み物が張り紙に書いてある。店主は一見70代かYシャツを着ていても、茶翁(さおう)とも売茶翁(ばいさおう)とも呼びたい風体である。不精髭のせい、低い声のせい、およそ喫茶店のマスターにはほど遠い。コーヒーを注文して店の中を見回していると、壁に貼ってある紙に江戸時代の旅立ちらしき風俗の人物が二人、一人は馬に乗り、もう一人は従者、その他に4, 5人見送っている絵が水墨で描かれている。そして絵の下に俳句が書いてある。芭蕉が、曾良を供にみちのくへの旅に杉風の別荘から出立しようとしている図である。

“行く春や鳥啼魚の目は涙”

夫人呟く、芭蕉の句よ、と。するとそれとなくコーヒーをいれながら聞いていたのか、売茶翁は、コーヒーを各々の前におきながら、誰にいうともなく、いまの学生は芭蕉も知らない、台湾のバナナの木かな？とはと、にこりともせず感慨する。

売茶翁芭蕉何かと問う学生

無知蒙昧と歎ずるしきり

そして芭蕉を知る人こそは、東大卒という。顔を見合せて笑う。どうも売茶翁は芭蕉が好きらしい。よく見ると、外の壁にも芭蕉の絵と俳句を書いた模造紙が貼ってある。

“夏草や兵(つわもの)どもが夢の跡”
の句を夫人が読む。

また、地獄耳の売茶翁は、カウンターから出てきて、この句を読む人はケンブリッジ大卒と淀みなく言う。

兵(つわもの)と読む人こそは 否東大
剣橋大(けんきょうだい)こそ似つかわし

(ケンブリッジ大学を以前、剣橋大学としたことがある。剣を音字とし、ブリッジの意味をとって橋とした翻訳合成語。)

その時の茶翁の論理は、飛躍的もいいところ。そうは言っても、学生を基準に置いて、芭蕉を知っているのは東大出身、さらに難しい「兵」を「つわもの」と外国人連れの一人が言うのをそれとなく聞いて、即時にケンブリッジ大出身というあたりは正に当意即妙で、彼なりに筋が通っている。まさに機知に富んだ松島町のご隠居さんといったところ。一同、笑いを噛み殺しながらコーヒーを飲む。意外に旨いコーヒーで、ゆっくり味わっていると、茶翁は、こ

れが当店自慢の「だだちゃせんべい」と2枚ずつ入ったのを、三人に配る。「だだちゃ豆」を使った珍しい煎餅で旨い。夫人と同じく話題も含めて土産にする。店主に別れを告げて店を出た途端、我慢していた皆は、一様に嘖き出してしまい、それは松島駅まで続いた。

松島での行楽の話題が、特にくだんの茶翁のもてなしが、ライアン夫人の口から所用で行けなかった家内に話されると、その時の茶翁の無表情を装った挙措が思い出されて、居合わせた者もまたまた笑い興じたことでした。

そのうちに、壁に掛けてあった書額を見ていたライアン氏は、「美しいですね」と言う。お向かいのこの度のコンサートの主催者のご母堂、書道の師匠の筆によるものであり ドイツ人の目に日本文化の一端を触れさせたいとの思いで額に入れて下さったもの、句(拙作)そのものとはもあれ、内容に応じた筆致の素晴らしさは心に響くもので、「美しい書ですね」と応じて彼の顔を見た。彼は「ナイン」そして言葉を継いで「句の内容を表す漢字、仮名の流れが美しいのです」と夫人の通訳で確かめる。多少とも真名、仮名の配りには留意してい

るものの、このように見られたのは初めてで、ここでも彼の繊細な美意識に触れた思いであった。因みに、この句は

「白鷺のあゆみ初むるや広瀬川(＊)」

この滞在期間を通じて、印象を深くしたもう一つは、4～50年前に使われていた日本語の優しさ、思いやりのある言葉の節々に触れたことでした。良き日本語そのままに若くしてドイツに嫁ぎ、昨今言われる日本語の乱れに染まることなく、夫人の言葉は、節目正しく自然に使われており、その通訳も細やかな時宣に即したもので深く感じ入ったことでした。

そのままに同時通訳進められ

団樂の妙は刻をともにす

カール・スルーエ独日合唱団に参加し、日本の青年達が音楽を通じてどの様に係り合い、一般のドイツの人々が、日本での合唱コンサートに人生の楽しみを見出している様子を身近に見て、大いに考えさせられた秋の数日でした。

(＊平成17年1月支部便りに掲載。)

前編の短歌の入力誤り

「福浦の枝の片蔭枝の痕の苔に生きん小さき花と木」は「福浦の杉の片蔭枝の痕に生きんと小さき花と木」でした。大変失礼致しました。お詫びして訂正します。

星さん、なかなか体験できないお話をありがとうございました。

「朋有り遠方より来る亦楽しからずや」孔子

学院専門部（東北学院大土樋キャンパス）と私

葛西 洋一

昭和12年の暮、猛吹雪のため駅まで馬車で出かけた青森と、5年間住むことになる土樋の家、その温かく春の様な空模様の仙台とでは、雲泥の差があった。

春になると水が増え、棒杭を縄で繋いだ筏を浮かべ遊んだ池。その北側にある木から木へ飛び移り、ターザンごっこや鬼ごっこをした林の、ブッシュにできた道を潜り抜け、子供一人が通り抜けられる位の穴を通ると、そこは学校の校庭のはずれであった。すぐ目の前の5メートル位の急斜面を上ると洋館が二軒あり、右側の家の庭は美しい花で覆われていて、留守番の小使いさんらしいおじさんが住んでいた。そこへ子供たちは石を手に急斜面を上ると、一斉に石を窓ガラスに投げつけると、体格のいいおじさんが姿を現す前に、一目散に逃げ出すのが通例であった。それでいながら、クリスマスには何食わぬ顔でクリスマスクリスチャンと称し、学校内の教会に出かけ、菓子などを貰って帰った時もある。また近くに土俵が作られると、結構楽しい遊び場にできたし、広々とした野球場やサッカー場で蹴球やラグビーを楽しむことができた。特にサッカーは、隣人の次男坊がキーパーをしており、その容貌から当時の女学生にも大分もてたこともあり、試合の観戦の機会も多く、自然にルールも覚え、お陰で今でも夢中でテレビにかぶり付いている。

又、野良犬を飼いたいと駄々をこね、祖母に叱られて、母からもらった餌を持って夜学院の校庭の真ん中に置き、餌を食べ始めたときに、追いかけるのを振り切って逃げかえったこともあった。

この様に、学院の校庭は私の小学校時代の成長に欠かすことの出来ない存在だった。言い換えれば「私は学院の庭で育てられた」と言っても過言ではない。

土樋から昭和19年裏柴田町に引っ越したが、その後も縁は切れず、学院の音楽の先生をしていた黒沼幸四郎先生（パイプオルガン奏者として有名）から声がかかり、中学生の時、聖歌隊員として宮城刑務所を2年にわたりクリスマスに慰問したことがあった。当然、練習は土樋の教会で行った。歳をとったせい、強い縁を感じるこの頃である。



はるけきに陽が沈みたる蔵王の峰
神々しくも暮れなずみゆき
繁 明

「70年のつけ」 千葉繁明

めでたく？古希を迎えた。仙台市から敬老乗車証を貰い、医療費も一割になった(但し20年3月まで)。ありがたいことである。楽しみは、好きな絵を描き、適当にお酒を飲み、気の会った仲間達と楽しく語り合うことである。以前から休肝日をと、よく言われるが、実行したことは無い。休肝日を実行しているなんて言う人は、尊敬どころか、仏様に見える。70歳になって、タダだと言うので市民検診を受けて見た。結果を聞きに行ったところ、糖が出ていますといわれ、生活習慣病だけは無縁と思っていたのでいささか愕然とした。ついでに、お腹のダブつきはどうしたらよいでしょうかと聞いて見た。いとも簡単に、年齢的に仕方ありません、どうしてもというなら外科に行って相談してみてくださいというではないか。妻に話したところ、以前に手術した事のある、日赤に行ってみたらというので、意を決して行ってみた。担当医師が紙に書いて説明してくれたのは、タイヤの絵である。古いタイヤ

が薄くなるとそこからチューブがはみ出してきますね。多分、以前手術したところが、弱くなってお腹の中の腸などがはみ出してきている状態です。腹を切ったんできていた部分を元に戻して、弱くなった部分を補強する手術をしましょうということになった。どおせ、何もすることが無い毎日であるからと、手術を受けることにした。11月14日に入院して15日に手術を受けた。簡単に考えていたが、1時間半の手術中、全身麻酔で眠っていたとはいえ、腹を切ったのであるから、当然痛い。目が覚めたら、あちこち管をつけられ、酸素マスクはつけられ、体は動かせず、切ってしまったからでは後の祭りである。点滴に利尿剤が入っているので、むやみにトイレに行きたくなる。普通は、管をつけて自然に流れるようにするのだが、管につなぐれるのがいやで断ったので、どうしようも無い。一晩ぐらい我慢できると思ったのであるが。夜中についに我慢できなくなり、ナースコールをした。どうしました。すい

ませんトイレが。我慢しなくて好いのですよと、尿瓶をあてがってくれた。さあどおぞ。そういわれてもなかなか出せるものではない。生まれて初めてなのである。最初は遠慮して、ちょろちょろ、後はもう我慢できない。思いっきり目をつぶって、ほとばしるほどに、たちまち、尿瓶は一杯になった。思わず涙が出てきた。あまりの気持ちの好さにである。二、三日して体から管を外してからは、暖かい病室で絵を描いたり、本を読んだりして、実に快適な入院生活となった。入院中は毎日、胃に優しいお粥食である。勿論アルコールは飲めないから、10日間程の入院中にしっかりと、休肝日を設けることが出来たのである。

入院している間に、気になっていた糖の検査や、眼科で白内障の検査をして貰い、全て何事も無い結果に安堵し、ついでにインフルエンザの予防注射もして貰った。



はからずも、一割の老人医療費で、70歳まで続けてきた、暴飲暴食でたるみきった我が老体を修復することが出来たのである。

退院してからは、せっかく元に戻した体であるから、上手に使っていこうと、一合の酒と、旬の一品をゆっくり味わい、適度に休養して、毎日、爽やかな気持ちで、好きな絵を描きながら、新たに齢を重ねたのである。

1月の行事

支 部

例会（昼食会）

1月17日（第3木曜）12時～

「しゃぶ禅」

出席の連絡を1月11日（金）までに木村さんか、友彦さんまで。

みちのく損保

新春セミナー、新年会

1月24日（木）



みちのく損保の行事と重なるので、第3木曜日に繰り上げました。お間違いの無いようお願いします。

後 記

力作(?)の原稿をお寄せ頂きありがとうございました。お陰様で編集にも力がはいります。少々目がショボショボしますが。今年も面白い話、珍しい事、或いは毒にも薬にもならない話、何でもお寄せ下さい。2月は行事お休み、次回「便り」は3月号です。